



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「インドに還る、インドに伝える」②

なんとか真野湾にたどり着き、妙照寺行のバスを待った。商店街らしき町並みだが閑散としている。地方都市の現状なのかと思っていると、やっとバスがやってきた。20分程で市野沢停留所についたが、妙照寺を目指すも、逆の方向に歩き出していたことに気付いた。高校生が親切にもスマートフォンで検索して正確な位置を示してくれた。時代遅れのガラ系携帯電話は役にたたないのか。いや、そんなことはない。そのお蔭で親切な高校生に出会えたではないか。これこそ旅のメリットだ。

『開目抄』は行動の原理を説いたものである。理論は天台・伝教大師が完成したのだが、それを実践するものがない。それを実践するものこそ Nichiren だという自覚の書である。

理論と実践。わが哲学の友には、議論好き理屈好きが多い。それを聞くわが輩の脳は空っぽになる。亥年の習性で考えることなく走り出すわが輩の両脚には、理論という脳ミソがない。

「盲人と歩行障害者の師匠と弟子は、ふたりとも墮落する」(『摩訶止観』)

なるほど、やはり理論と実践がなければならないのか。

小高い丘に向かっていくと実相寺の看板がみえた。「Nichiren 思親の霊場」とあるが、時間がなかったのでさらに奥の妙照寺を目指した。

Nichiren は4ヶ月後に塚原から一の谷(さわ)に移った。近藤清久という入道(念仏信徒)が面倒をみることになった。墓場から草庵へと環境は一気によくなった。

寒さと孤立の中で『開目抄』を著したが、少し余裕ができたので『観心本尊抄』を著すことができた、とわが輩は思う。

『開目抄』は外に向かっていくが、『観心本尊抄』はやや内向きである。さりとて哲学的かというところでもない。一般的に哲学は「自己とは何か」を追及するが、Nichiren のそれは「人間とは何か」を視点としている。自分を旃陀羅(インドの下層民)の子と称して下位から世界を観ようとしている。

「観心」と「本尊」を分けてはいけないという宗門の学僧がいる。わが浅い理解によると、拝む対象を外に出してしまうと仏像や石像などの“物”になってしまう。つまり拝む者と拝まれる対象が分離して二元論になってしまう。「観心」と「本尊」は一語、一元論でなければ

ならない。

難問は、その本尊とは何か、ということである。

永遠のブッダである。わが理解によると、“ブッダから身体を取り除いたブッダ”ということになる。

さて、永遠のブッダはどこにいるのか。どこに観ることができるのか。まずは、われらの心の中である。ところが、われらの心は清濁二根を、いや清濁多根をもつ身である。仏教用語でいえば、「一念三千」である。われらの瞬間的な想い(一念)の中にさまざまな清濁多根(三千世界)があるというわけだ。それらが複雑に入り混じっている。

わが興味を引き付けるのは、仏の世界にも“濁”があるということである。立派そうに見える先生や出家者にも濁がある。逆に、餓鬼畜生にも“清”がある。

ここがポイントになる。読者諸氏の目の前にいる憎き存在にも“清”がある。

インド哲学では清濁は対立するものである。それゆえ苦しみ多き「俗」を離れて、安楽な「聖」に向かおうとする。残念ながら、われらはどこまでいっても、たぶん仏の境地に至っても、清濁があり続ける存在なのである。そしてついつい“清”あることを忘れてしまう。

そこに登場するのが、サッターパリブータ (Sadāparibhūta) である。「あなたにも“清”がありますよ！」と呼びかけつづける人である。その名は、決して相手をけなさない人 (Never disparaging) の意味である。彼は自己の心だけではなく、われら存在すべての内に“清”を観ていた。

あの戦闘的な Nichiren を理解するとき、菩薩サッターパリブータを外して考えることはできない。

妙照寺は重厚な茅葺の寺院である。建築学的にも素晴らしい堂である。もちろん往時は質素な庵であったであろう。絵額を見ると、さまざまな人が来訪している。『観心本尊抄』は対論のかたちをとっているので、中には論破してやろうと思って来た人もいたであろう。

Nichiren にとって流罪は、充実した時間でもあった、と思える。佐前、佐後の思想の変化は環境によるものではなく、思想の確立による変化だと思える。

それが分かれると、佐渡島のイメージが変わってきた。けっこう明るく豊かな島だよ、と読者諸氏に観光をお勧めしたい。